Osaka University Knowledge Archive

Title	社会的距離の構造に関する研究 : マイノリティや国家に対する社会的認知の分析を通して
Author(s)	武藤, 麻美
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/56032
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　武藤　麻美　）	
論文題名	社会的距離の構造に関する研究 ――マイノリティや国家に対する社会的認知の分析を通して――

論文内容の要旨

本研究では，集団成員への排除の一つの指標と考えられる社会的距離の延伸に着目し，その態度構造と，そこに作用する要因について検討した。本研究では，社会的距離を行動面測定項目 (拒否や回避行動の程度とその行動への志向性) や，認知面測定項目 (サブタイプ化の程度)，感情面測定の線分 (親近感の程度) などを用いて測定し，各方法で得られた値の関連を見た。さらに，認知面と感情面が，行動面を予測することも確認し，親近感が薄れ，相手をふつうではないと見なすことが，非受容的・回避的行動を促すことを示した。また，認知対象として，精神障害者や多様な家族形態とそこで生活する児童，さらには国家を基にした内・外集団 (日本・米国・中国) を設定した。個人 (ミクロ) から家族 (メゾ)，国家 (マクロ) へと社会的距離の評定対象カテゴリーを拡大し，各カテゴリーレベルにおける社会的距離について広範な知見を得た。そして，社会的距離に影響を及ぼす要因として，帰属複雑性や曖昧さ耐性，ジェンダー観 (性役割態度)，集団に関する期待値と現実値の乖離，集団同一視，さらに性別や年齢，社会人経験の有無，認知対象との接触経験の有無などのデモグラフィック要因の効果も検討した。

第2章では，個人 (精神障害者) に対する社会的距離を，サブタイプ化測定項目 (認知面測定項目) を用いて検討した。また，サブタイプ化が生起する際の，認知者の内的プロセスと，年齢や性別などのデモグラフィックな要因が，サブタイプ化に及ぼす効果も検討した。その結果，認知者が精神障害者の言動を理解できない場合，認知的統制感を取り戻すために社会的距離を変化させ，相手と心理的に距離を置こうとすることが明らかとなった。そして，この傾向は男女ともに見られ，特に若年になるほど，不安を媒介要因として社会的距離が変化することが示された。若年者にとって，理解できない他者は，すぐに心理的排除の対象になる可能性が示唆された。

第3章では，精神障害者に対する社会的距離について，提示する刺激文の条件を増やし，精神障害者との接触経験や既有知識の量も統制した実験を行った。そして，認知者の曖昧さ耐性や帰属複雑性などの要因が，社会的距離に及ぼす効果についても検討した。また，精神障害者への心理的な排除は，共生や共働の敬遠といった行動的側面にしばしば表れることから，行動面測定項目を設定した。さらに，行動面と認知面，感情面 (親近感の低下) との関連を明らかにし，社会的距離の構造を検討した。その結果，帰属複雑性の高低は，他者の行動理解へのモチベーションや，行動の原因の解読，他者への心理的なオープンさを予測することが確認された。帰属複雑性が低い人は，どのような人物に対しても理解度が低く，全般的に他者を否定的に認知しやすいことが明らかとなった。また，曖昧さ耐性が高いほど，精神障害者に対する社会的距離が近くなることも示された。曖昧さ耐性の高低によって，行動の原因推測が困難な対象を，受容しようという意欲が影響される可能性が示された。さらに，社会的距離を遠ざけるための認知的方略であるサブタイプ化と，拒否的行動，情緒的方略である親近感を弱めることなどが互いに関連し，特に認知面と感情面が行動面を予測することが明らかとなった。これより，対象と認知的に距離を置こうとすると親近感も薄れ，否定的態度も強くなり，物理的に距離を置こうとすることが推察される。

第4章では，児童と家族に対する社会的距離を検討した。昨今増加傾向にあるステップファミリーやひとり親家庭，社会的養護を行う施設での生活，里親委託事業などの形態に対する心理的受容の程度を，非受容的な行動に関する測定項目や，サブタイプ化測定項目を用いて検討し，帰属複雑性や性役割態度の影響についても確認した。その結果，帰属複雑性が高くなるほど，性役割態度も平等主義的となることが確認された。そして，平等主義的性役割態度が強く，帰属複雑性が低い人では，里親やひとり親，ステップファミリーと暮らす児童に対して社会的距離が近かったが，児童養護施設利用児

童に対しては社会的距離が遠かった。平等主義的性役割態度であっても，帰属複雑性が低いと，児童養護施設のような，親の機能を果たす人が少ない家族形態を受容できない，または児童養護施設を家庭として見なしていない可能性が示唆された。また，伝統主義的性役割態度を持ち，帰属複雑性が低い人は，ひとり親家庭への社会的距離が遠かった。これは，両親と実子から成る家族プロトタイプを重視する，伝統主義的性役割態度の効果の大きさがうかがえるうえ，帰属複雑性の低さから，児童の家庭背景を考慮することが乏しく，児童やその家庭を否定的に認知したと考えられよう。

第5章では，対象カテゴリーの範囲を国家へと拡大し，日本や諸外国を内・外集団として設定した。認知者が個人や家族に向ける社会的距離のみならず，国家という広範なカテゴリーに向ける社会的距離と，そこに空間的距離の遠近に関する認知がどのように影響するかも検討した。社会的距離は行動的側面に着目した。その結果，内集団 (日本) については，既存の印象 (ポジティブ感情) とその強さが強固であるため，空間的距離が遠いという刺激情報を受けても，内集団への評価は変動しにくく，社会的距離は遠くならなかった。一方，既存の印象がポジティブな外集団 (米国) とネガティブな外集団 (中国) では，前者で空間的距離の長短の認知が社会的距離評定値に影響しやすいことが確認された。集団に関する既存の好意度とその強度が，物理的・心理的刺激のインパクトに対する緩衝効果を持つことが示された。米国のような，既存の印象がポジティブで，その強度が弱い国については，少しのプロパガンダにより，世論が大きく変動しかねない可能性が示唆されたといえる。

第6章も，国家を対象カテゴリーとし，社会的距離の感情的側面である親近感を測定した。そして，内・外集団成員 (日本人・米国人) に対する社会的距離 (親近感) と好意度の関係や，これらの変数に影響する要因についても検討した。その結果，社会的距離の感情的側面は，対象の期待値と現実値との乖離の効果によって変動し，嫌悪感と連動することが明らかとなった。さらに，非受容的行動への志向性と，親近感を弱めることとの関連も確認されたことから，親近感が薄れると嫌悪感も増大し，物理的にも距離を遠ざけようとする，負の連鎖の存在がうかがえる。このことは，例えば外国人や，異なる思想・文化・宗教・生活背景を持つ人に対するヘイトスピーチ (言葉による排斥) や，社会やコミュニティから追放しようとする行動が，激しい嫌悪の感情を伴い，相手を人間扱いしようとしない残酷な態度にも繋がりかねないことを示唆する。

以上より，次のことがいえよう。すなわち，対象を理解できない場合，社会的距離は遠くなる。このとき，不安を媒介要因として社会的距離は変動している。また，帰属複雑性の低さや曖昧さ耐性の低さ，伝統主義的性役割態度は社会的距離の延伸に繋がる。なお，これらはミクロ・メゾの社会的カテゴリー，具体的には社会的マイノリティを対象にした場合に該当する。マクロレベルのカテゴリーである国家を対象とした場合は，既存の印象の正負やその強度が，社会的距離の変動を左右する要因となる。そして，対象に関する期待値と現実値のギャップの効果は，社会的距離を変化させ，良い意味で期待を裏切られたというギャップならば社会的距離は近くなり，悪い意味で期待を裏切られたというギャップならば社会的距離は遠くなる。なお，いずれのレベルでも，社会的距離を遠ざけるという態度は，行動的側面に顕著に表出される。そして，その背後では，認知的側面と感情的側面が，行動的側面に影響を及ぼし，促進しているのである。

さらに，上記の得られた知見をモデル図化し，提案した。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　　名　（　武藤　麻美　）			
論文審査担当者		（職）	氏　　名
	主 査	教授	釘原　直樹
	副 査	教授	日野林　俊彦
	副 査	教授	赤井　誠生

論文審査の結果の要旨

本論文は，社会的マイノリティに対する排除の問題に焦点を当て，排除の一つの指標と考えられる社会的距離が，どのような条件下で伸長するか，どのような人が社会的マイノリティに対する社会的距離を遠ざけやすいかを検証したものである。そして，この社会的距離について，行動面測定項目（拒否や回避行動の程度とその行動への志向性）や，認知面測定項目（対象を特殊と見なすサブタイプ化の程度），感情面測定の線分（親近感の程度）の三側面から測定し，各方法で得られた値の関連も検討している。これは，これまで社会的距離の測定が，主に行動面測定項目を用いたものに限られており，行動面に表出された現象しか捉えられていないためである。認知面や感情面に表出される社会的距離については十分吟味されてこなかったため，そのような側面についても検討し，社会的距離の全体的様相の解明を試みている。また，認知対象として，個人（ミクロ）から家族（メゾ），国家（マクロ）へと社会的距離の評定対象カテゴリーを拡大し，各カテゴリーレベルにおける社会的距離について広範な知見を得ている。そして，社会的距離に影響を及ぼす要因として，帰属複雑性や曖昧さ耐性，ジェンダー観（性役割態度），集団に関する期待値と現実値の乖離，集団同一視，さらに性別や年齢，社会人経験の有無，認知対象との接触経験の有無などのデモグラフィック要因の効果も検討している。

本論文は全7章から構成されている。第1章では，何故社会的距離の全体的様相を明らかにする必要があるか，昨今の日本の医療・社会・福祉領域が抱える問題を採り上げながら議論している。第2章では，個人（精神障害者）に対する社会的距離を検討し，その結果，若年になるほど，不安を媒介要因として社会的距離が変化することが示されている。第3章では，精神障害者に対する社会的距離について，認知者の曖昧さ耐性や帰属複雑性などの要因が及ぼす効果について検討している。その結果，帰属複雑性が低い人は，全般的に他者を否定的に認知しやすいことと，曖昧さ耐性が高い人は，精神障害者に対する社会的距離が近くなることが示された。さらに，社会的距離の構成要素である認知面と感情面が，行動面を予測することも明らかとなった。第4章では，児童と家族に対する社会的距離において，帰属複雑性や性役割態度が持つ影響について確認している。その結果，平等主義的性役割態度であっても，帰属複雑性が低いと，児童養護施設のような，親の機能を果たす人が少ない家族形態を受容できない，または児童養護施設を家庭として見なしていない可能性が示唆されている。また，伝統主義的性役割態度を持ち，帰属複雑性が低い人は，両親と実子から成る家族プロトタイプ（家族の典型）を重視し，児童の家庭背景を考慮することが乏しいため，ひとり親家庭を否定的に認知しやすいことが示されている。第5章では，国家に対する社会的距離と，そこに物理的・心理的刺激（e.g., 空間的距離の遠近に関する認知）がどう影響するかを検討している。その結果，集団に関する既存の好意度とその強度が，物理的・心理的刺激のインパクトに対する緩衝効果を持つことが示されている。第6章では，国家に対する社会的距離が，対象の期待値と現実値との乖離の効果によって変動し，嫌悪感と連動することが明らかとなっている。第7章の総合考察では，各研究で得られた結果を統合し，モデルを提示している。

本研究の知見は，高齢者や障害者の地域生活支援や，更生保護制度の普及，またグローバル化社会の到来にあたり，多文化ないし多様な価値観・背景を持つ人たちを受け容れ，共存する，共生社会の実現に寄与すると考えられる。そして，当該領域の研究をさらに理論的に拡張できる可能性もある。本論文には，著者の研究者としての成長過程とその成果が十分に反映されており，今後の研究発展の可能性が予想される成果であると評価された。以上より本論文は，博士（人間科学）の学位授与に値するものと判定された。